

エコ・ツーリズムとツーリズムのエコロジー

——ベリーズの事例から——

江 口 信 清*

I. はじめに

マイアミ空港の中米への出発ロビーはリュックサックやデイバックを背負った半ズボンにティーシャツ姿の老若男女であふれている。首に双眼鏡を吊った人も多くみられる。彼らの多くはグループ・ツアーに参加している。胸につけられたツアー名を記したタグには「インターナショナル・エクスペディション」(アラバマに本部がある)、「エコ・アドベンチャー」(カリフォルニアに本部がある)などの有名な団体名が印刷してあり、各人はツアー・ガイドの話に熱心に耳を傾けている。初顔の人同士でツアー参加の動機や趣味などを中心に自発的に自己紹介が行われもしている。お互いに旅行先での虫避けの薬や食べ物などのささいな心配までしている。退役軍人夫婦、夫が電気配線技師の家族、大学教授、学生、看護婦など、彼らはじつに多様な背景を持つ人たちからなっている。しかし、彼らは共通項で互いに結ばれている。それは、自然愛好家であり、かつ観光客であるという点、すなわちエコ・ツーリストという共通項なのである。

エコ・ツーリストであれ、カルチャー・ツーリストであれ、どのような観光の形態や

目的をもつとしても、あまりにも平凡になってしまった単調な日常生活から自発的に逃れ、一時的に非日常世界へ身を置き、そして珍奇な、わくわくするような体験をすることをつうじて日常世界へ再び戻り、活動するエネルギーを充足するという点にツーリストとしての共通項がある¹⁾。精神状態を再生させるという観光する側の個人的な側面だけでなく、観光される側の経済にも観光はひじょうに重要性をもち、今日の世界、とくに発展途上国の多くにとってなくてはならない産業にまでなりつつある。世界観光機構は、観光が2000年までに世界でもっとも重要な基幹産業になるであろうと予測している²⁾。また、同機構によれば、冒険旅行(WTOの定義にはエコ・ツーリズムもこれに含まれる)が1989年には観光市場の約10パーセントを占め、年間30パーセントの割合で増加している³⁾。

本稿では、伝統的な、従来の大量観光(マス・ツーリズム)に代わってとくに発展途上国で注目されてきたエコ・ツーリズムとは何か、その今日的な意味は何かという点が、近年エコ・ツーリズムに力を注いでいる中米のベリーズの事例を中心に用いて、じゃっかん考察される。

* 立命館大学文学部地理学教室

Ⅱ. マス・ツーリズムに代わるオルターナティブ・ツーリズムとエコ・ツーリズム

近年、従来からのマス・ツーリズムについて、それが創出するホスト社会への様々な悪影響をめぐって批判的な議論が展開されてきた。現地の社会・文化・自然環境の破壊につながるという批判である⁴⁾。そして、この従来型のマス・ツーリズムに代わって提唱されてきたのがオルターナティブ・ツーリズム（選択的観光）である。これは現地の自然環境についてひじょうに配慮した、できるだけ既存の環境に影響を与えないような形態の観光を指している。この種の観光は「ネイチャー・ツーリズム」⁵⁾、「エコ・ツーリズム」、あるいは「オルターナティブ・ツーリズム」などと称されているが、「グリーン・ツーリズム」と同類の形態を指していると Gulez は述べている⁶⁾。呼称はどうか、現地社会・文化に対する影響をほとんど考慮していない従来型のマス・ツーリズムに対して出現してきた新たな形のツーリズムの形態がオルターナティブ・ツーリズムで、その一つが既存の生態系にできるだけ影響を与えずに観光するというエコ・ツーリズムである、とここでは理解しておく。

しかし、エコ・ツーリズムの定義もじつは多様である。観光についての最初のまとまった人類学的な書物を編集したスミスによれば、エコ・ツーリズムとは「しばしば民族観光に付随的で、真の異国を体験するという目的で、旅行通の観光客を南極大陸のような遠隔地へ引き付けるものである。「環境観光」は、もともと地理学から起こったものなので、多く

の学究的な旅行者が人間と土地との関係を見極めることを目的として、山や僻地を車で走ることによってそれを楽しんでいる」としている⁷⁾。日本の人類学者で観光研究の草分け的な石森秀三は、この概念をより限定的に定義している。「エコ・ツーリズムは自然環境に対するインパクトを最小限にとどめて、観光客が一定地域のファウナ（動物相）とフローラ（植物相）を観察しようとする観光のあり方」⁸⁾としている。この場合、観光客と現地の人たちとの接触は何等かの形であるということが前提にされている。

他方、ナイデヴァーは自分自身では定義することができず、エコ・ツーリズム協会「現筆者はこの協会がどのようなもので、どこに位置しているのかも知らないのだが」の定義を借用している：エコ・ツーリズムとは「エコシステムの統合性を変えないように気を付ける一方で、他方では現地の人たちにとって利益をもたらす天然資源の保護をする経済的機会を作り出しながら、文化と環境の自然史を理解するために自然の地域を訪ねるという目的を持った旅」⁹⁾である。さらに、ナイデヴァーはエコ・ツーリズムという比較的新しい形態の観光の出自について触れ、それが環境保護運動と観光産業の双方の動きの中から生まれてきたものとし、とくに国際的なマス・ツーリズムに対置しながらその特徴を次のように説明している。観光客、観光業者、そして行政は近年じょじょにマス・ツーリズムとは異なった、誰にとっても「より良い」観光があることに気が付き始めた。すでに確立された観光地以外の所を少人数で観光することが可能であることに人々は気づきはじめた。さらに、この種の観光は従来のマス・ツーリ

ズムよりもしばしば安くつき、さらに楽しめる。ナイデヴァーはこのようにしてエコ・ツーリズムをマス・ツーリズムに比較して「よりよいもの」と見なしている¹⁰⁾。

ようするに、経済成長とともに環境破壊・環境汚染がいちじるしく進行したが、それと並行してパッケージ・ツアーを含むマス・ツーリズムも著しく普及してきた。この普及は観光客を受け入れる現地の環境だけでなく、そこに暮らしている人たちにも様々な面で大きな悪影響を与えてきた。このような状況を背景に、自然環境や人々への悪影響を最小限にとどめ、しかも観光客の落とす金が現地の人たちの経済へ大きく貢献し、さらに環境保護にも役にたつという玉虫色の観光形態としてエコ・ツーリズムがとくに80年代になって見直されてきたのである。

エコ・ツーリストが訪れる、自然環境が多く残されている空間には、それに長い間依存してきた人たちが生活している場合が多い。これらの人たちに対して欧米人観光客の多くは自民族中心主義的な態度をもち、しばしば「未開人」として臨んできた。一方では彼らの「未開性」「後進性」にたいする自らの優越感を維持し、他方においてはこの「未開性」「後進性」を自然美として賞賛するのである。自らを観光客として「未開性」「後進性」の中に置き、これらの人たちと「同じ体験」をし、「彼らと百パーセント理解し合えた」というような幻想を持つ。電気も水道もない「不便な」生活を短期間体験することで、「未開性」「後進性」を背負わされた人たちへの無意識のしょく罪としようとする。そうすることで自らの優越性を再確認し、母なる自然から生まれ出る赤子のように精神的に浄化し、

再生して自分たちの日常世界へ戻っていく¹¹⁾。そういう意味では、エコ・ツーリズムにとっては自然だけでなく、「未開性」「後進性」を体現している現地人の存在は不可欠な要素であるといえる。

しかし、問題の多いマス・ツーリズムに代わって出現したエコ・ツーリズムは、そのみで玉虫色の観光形態として持続性を持ちうるものなのであろうか。レイ・アシュトンという人はエコ・ツーリズムの進化をつぎのように図式的に述べている。まず、ツアー会社がエコ・ツーリズムに適した空間を発見し、2、3年のうちに観光市場に紹介し、当初はわずかの人がそこを毎年訪れる。観光客を引き付けるように宣伝し、実際に客が現地に行くようになるまでにたいてい18カ月はかかる。観光客は冒険好きで、野生生物を観光することを期待している人たちである。施設は質素で、一度に最大20人ほどしか宿泊できないようなものである。市内に向かうオペレーターは、この特定の空間へのツアーを他の観光地へ向かう客にも売りはじめる。観光施設をもつ経営者は予定表を作る問題に直面しはじめる。なぜなら、他の観光地を志向していたオペレーターが、エコ・ツーリズムの観光地を開発したオペレーターの成功を耳にして、彼らの顧客にこの観光地を提供することにするからである。その結果、すべての利用可能なベッドが満たされる。ホテル経営者は需要を満たすために施設を拡張しようとする。このためには、経営者はたいてい高い利子率でローンを得なければならない。高い利子の支払いをするために、施設をさらに拡張していかなければならない。このようにして、成長カーブはどんどん上昇していく。このカーブ

は競争と潜在的な市場を拡張する必要性によって成長する。他のホテル経営者は魅惑的な自然のコミュニティ（たとえば、ジャングル、川、湖、滝など）の有利さを生かすために施設を「自然」の近くに建設しようとする。もともとからある施設と競争するために、アメニティはより良く、より魅惑的でなければならない。このことはもともたいる経営者をもってして施設を拡張させ、アメニティをより魅惑的なものにさせることになる。多くの発展途上国ではこのための資本を獲得するのが困難なので、外部の投資家がこの成長に投資するべくアプローチする。銀行はこの商売での利益がわずかであることを知り、投資を保護するために開発はある程度の規模であることを要求する。この開発はより大きな交通インフラストラクチャー、訪問者のサービスを要求し、ほとんど自然の基盤を持たないような観光をついには作り出す。行き着くところはどこにでもある観光地の一つになるということである¹²⁾。

アシュトンが描く通りにエコ・ツーリズムが進化するかどうかの当否は別にしても、ある程度この図式は当たっている。たとえば、

第1表 観光客数の推移

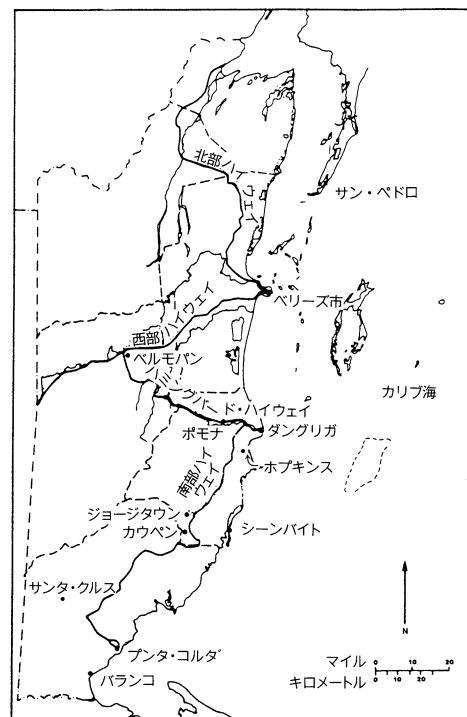
年度	宿泊観光客数（単位：万人）
1985	93.4
1986	93.8
1987	99.3
1988	164.3
1989	219.7
1990	220.0

出典：1985-1989の資料は Caribbean Tourism Organization による Caribbean Tourism Statistical Report 1989 から、そして1990のものは『1994 世界各国要覧』（二宮書店）359頁によっている。

ベリーズ自体がエコ・ツーリズムで知られはじめて、第1表でみるように、自然志向の観光客が着実に増加している。エコ・ツーリズムの宣伝も増加している。これはパンフレット類だけでなく、観光案内書などでも同様である。ベリーズを含むカリブ海諸国での最近の観光政策の重要な柱の1つがエコ・ツーリズムの推進であり、その動きはあたかも別なマス・ツーリズムの1つにエコ・ツーリズムを進化させるのではないかという危惧を持たせるほどのものである。

Ⅲ. ベリーズの概況

ベリーズの国土は2万3千平方キロメートルであるが、人口は1991年度でわずか19万4千人余りしかいない（地図1）。言い替える



第1図 ベリーズ

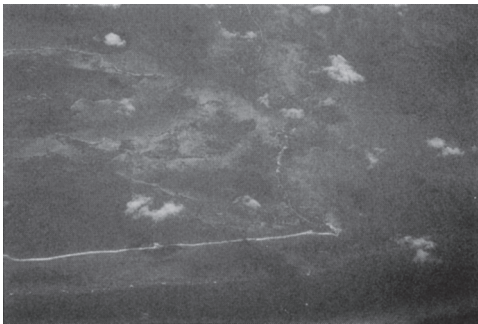


写真1 ベリーズ東北の沿岸部

と、人口密度は1平方キロメートルあたりわずか8人という低い数字になっている。これはこの国の地勢的な特徴と、歴史的に遅れた開発に起因している。国土の大半が熱帯気候(Af)に属し、海岸部には干潟が多く、マングローブの林が生い茂っており、先住民も相対的に少なかった。したがって、1503年にコロンブスらが来航し、スペイン領にはなったものの、この地は彼らの植民地としての魅力には欠けていた。スペイン人の植民地化が黄金とかなりの数の先住民の支配とに主眼点が置かれていたからである。そのために、これ

らの海岸部の低地部分は植民の後発者（イギリスら）の手に残されたのである。

中央部からの東へ流れる河川はベリーズの海岸部に泥状の運搬物を堆積してきた。この海岸線は数知れない珊瑚礁と石灰岩の礁で縁どられている（写真1）。先住民はおもに内陸の高地部分に居住し、15世紀まで高度なマヤ文明を支えていた。しかし、15世紀以降、原因ははっきりしないが、急速にこの文明は衰退していった。イギリス人らは先住民を使ってではなく、外部からの移入労働力によって開発をしていくことになる。1862年に正式にイギリスの植民地になり、それ以降本格的に開拓が行なわれていく。開拓の主力になったのは同じイギリス領であったジャマイカからの移民（アフリカ系が主）である。1981年にベリーズはイギリスから独立し、今日に至っている。

今日の国民を民族的にみれば、先住民（マヤ語族）、アフリカ系住民（クレオール）、黒カリブ族（「ガリフナ」：彼らは1797年にセン

第2表 民族別人口（1991年）

民 族	人口数	百分率（％）
クレオール (Creole)	55,051	29.8
インド人 (Indian)	6,455	3.5
ガリフナ (Garifuna)	12,274	6.6
マヤ・モパン (Maya Mopan)	6,770	3.7
ケクッチ・マヤ (Kekchi Maya)	7,954	4.3
他のマヤ (Other Maya)	5,686	3.1
ドイツ・オランダ系メンノナイト (German/Dutch Mennonite)	5,763	3.1
メスティーソ (Mestizo)	80,477	43.6
中国人 (Chinese)	747	0.4
シリア・レバノン人 (Syrian/Lebanese)	167	0.1
白人 (White)	1,494	0.8
その他 (Other)	1,867	1.0
知らない・無回答 (Don't know/not stated)	17	0.0

出典：1991 Population Census Major Findings. Belmopan: Central Statistical Office, Ministry of Finance, Belize の Total Population by Ethnicity and Sex for Major Divisions より。

第3表 ベリーズの主要輸出品目

輸出総額	1.0億ドル
輸出品目	百分率 (%)
砂糖	40.9
オレンジ類	20.5
衣類	14.5
その他	24.1

出典：『1994 世界各国要覧』二宮書店 (p. 359) による。

ト・ヴィンセント島からイギリス軍によってホンジュラス沖のラタン島へ強制移住させられた人たちの子孫)、そしてイギリス系・スペイン系白人と彼らの間の混血をはじめ多様な民族からなっている (第2表)。

1990年度の輸出品目で金額的に主要な順に並べたものが第3表であるが、近年の砂糖や他の農産物の市場価格の低迷が観光に力をいれさせることになる。

ベリーズの近接国にエコ・ツーリズムでは先進国のコスタリカという手本があるし、国内の沿岸部には世界で2番目の規模の珊瑚礁があり、また広大な未開発の土地が残り、その中にはマヤ遺跡がたくさん残っている。原生林の中にはジャガーや珍しい鳥などが棲息しているし、人里近くホエザルが群生してい



写真2 パブーン・サンクチュアリでホエザルの生態を観光するエコ・ツーリストたち

る (写真2)。自然環境という手持ちの資源を最大限生かし、しかも持続的発展を実現するためには観光が有利という結論が出された。

Ⅳ. ベリーズでのエコ・ツーリズムをめぐる5つの主体

Ⅱでみたエコ・ツーリズムの定義には少なくとも5つの主体が見えかくれしている。一つは、観光客そのものの立場であり、自然環境保護主義者のそれであり、現地の人たちのそれであり、観光関連業者 (観光ブローカー)、そして国家の立場である。ベリーズの事例に基づいて、これらの5つの主体の特徴をかんたんに見てみよう。

a. 観光客

観光客の立場には少なくとも2つの共通点がある。それらは、(1)手の加えられていない本来の自然 (ファウナ・フローラ) を楽しむこと、(2)現地人の自然な生活=環境の一部になっている「本物の」生活を体験して、楽しむことである。これらの2点には、共通性がある。それは、観光客が本性を追求するという点である。自分たちの日常世界の人工物に囲まれた自然、檻に囲まれた自然ではなく、観光客は人の手がつけられていない、開け放たれた状態での自然を探求し、人工物が自然の中に埋没している状況の中に身を置くことである。

1993年1月から6月にかけてベリーズを訪問した観光客のうちで、無作為に空港でインタビューされた206人からの調査結果をパラツィオとマックールは次のように分析している¹³⁾。観光客は次のような4つのカテゴリーに分類される。

(1)「自然逃避者 (Nature Escapists)」は自然を評価し、それについて学ぼうとし、逃避に重要性を見いだしている人たちである。彼らの多くはベリーズのみを訪れる。

(2)標本の約18パーセントは「エコ・ツーリスト (Ecotourists)」である。彼らはがいて若者からなり、ベリーズを初めて訪れたものが多く、どうも「いろいろな国を訪れて」いるらしい。彼らは現地文化を含む広範な種類の自然、文化的特質に関心を持っている。

(3)「気楽な自然愛好家 (Comfortable Naturalists)」が標本の33.3パーセントを占めている。彼らは自然と逃避に関心を持っているが、比較的気楽にそれを実践したい人たちである。彼らは以前にもここを訪れ、他の類型の人たちよりも長い期間滞在する。

(4)「受身的な遊び人 (Passive Players)」は観光の動機がどちらかというと受身的な人たちであり、全体の26.9パーセントを占めている。彼らはむしろ浜辺に横たわったり、シェノーケリングをすることに関心を持っている。

(1)-(3)の観光客は、いずれにしても自然、および自然の一部になっている現地人・現地文化に関心を持っているということである。

b. 自然保護主義者

そして、自然環境保護主義者の立場からいえば、自然環境をこれ以上痛めつけないレベルで観光客に提供し、観光客の落とす現金で、自然環境を保護するための費用を賄おうとするという点に特徴がある。また、これらの人たちには、自然環境を保護することでそれらに関する研究を続けようとする研究者も含まれている。たとえば、「ベリーズ・オードゥボン協会」(Belize Audubon Society: 鳥類協会)や「世界野生生物基金」

(World Wildlife Fund)、「国際野生生物保護」(Wildlife Conservation International)、そして「ベリーズ環境研究センター」(Belize Center for Environmental Studies)などの内外の機関がこれに該当する。彼らの別な特徴は、科学的な立場から自然環境を保護しなければならないという点を強調するということにある。

c. 現地人 (草の根レベル)

他方、現地の人たちの立場からは、自分たちの生活水準やコミュニティ・レベルでの福祉の水準を持続的に向上させるために一定数の観光客を誘致し、しかも自分たちの伝統的な社会・文化を維持していこうとする点に特徴がある。とくに、観光客の受け手が第一次産業従事者の場合、農産物の国際価格の低迷、就業機会の欠落（いいかえれば、主産業以外での現金収入の機会の欠落）などのために、マス・ツーリズムでは要求されるような人工物を作ったりしないことがかえって喜ばれるエコ・ツーリズムが、てっとりばやい現金収入の機会として積極的に受け止められてきた。後でも触れる、ベリーズ東南部の、トレド地区の「トレド・エコツーリズム協会」なども上のような主旨で地域住民が自発的に組織した団体である。

d. 観光関連業者

ベリーズ国内の観光関連業者は独自の組織を作っている。ホテル、レストラン、ツアー会社などの私企業が母胎になって「ベリーズ観光産業協会」(Belize Tourism Industry Association)をつくっている。また、とうぜん国外の業者もこの範ちゅうにはいる。

e. 国家

そして、国家の立場は、前述の4者の立場

をすべて包み込むようなものであるが、最大の目的は観光収入を主たる財政基盤にしようとするものである。この点は、彼らの政策にかいまみられる矛盾した態度を見れば明かである。これらの5者の立場をつなぐものが、観光客のおとす現金であることはいうまでもない。そして、政府がエコ・ツーリズムにいかん力を注いできたかは、観光を扱う省庁が、環境を扱うそれと同一の観光環境省であることをみても明かである。この観光環境省の下に観光局が設置されている。

1993年9月15日にベリーズの観光環境相ヘンリー・ヤングによって提出された国の「観光政策声明」には次のような国の政策が羅列されている：

- (1)「市場 (marketing)」
- (2)「訓練 (training)」
- (3)「経済的利益 (economic benefits)」
- (4)「環境上の主導権 (environmental initiatives)」

そして、結論としてベリーズの自然、文化的な遺産を強調する「国家観光計画」を作ると述べられている。観光関連産業のレベルからは、この分野の包括的な計画を作るためにツアー・オペレーター、ホテル業者、観光代理店、非政府組織、そしてコミュニティ・グループの連帯が不可欠であるとしている。また、持続可能で、実行可能な観光産業を確保するためには、生態学的な概念が計画の全過程に動員されなければならないとしている¹⁴⁾。いずれにしても、a-eの観光をめぐる各主体の思惑は異なっているが、「エコ」(生態・環境)と現金という微妙な接点でかろうじてつながっている。

V. エコ・ツーリズムの実験： サンタ・クルスの事例

「トレド・エコツーリズム協会」という私設団体がある。彼らは観光客(ゲスト)による現地の社会・文化と自然環境への影響を最小限に制御し、しかも安定的な収入を得、地域全体の福祉を考え、さらに地域全体の環境の保全を計画してきた。1991年8月に「トレド地区ヴィレッジ・ゲストハウス計画」が正式に開始された。これはトレド・エコツーリズム協会(いくつかの村の住民とプンタ・ゴルダでゲストハウスを経営するアメリカ人、S氏で構成される)の産物である。協会の目的とするところは、トレド地区(ベリーズ南部の一地区)のマヤ族の村で規制された、責任ある観光形態を創り出し、それから出る利潤で村全体の保健、教育、そして農業を改善・向上させることにある。村に設立されているゲストハウスに観光客を泊め、村人の家で食事をさせ、音楽演奏や踊りを提供し、近くのマヤ遺跡や滝へ案内したり、薬草を教えながら山を案内する、といった内容からなっている。

村人の生活と現存する自然環境への影響を最小限にとどめるという意味で次のような点が規制されている。各村にはマヤ族の伝統的家屋である草葺の1軒のゲストハウスが設けられているが、最高8人まで泊まれるベッドしか用意されていない。大きな村では1軒以上のゲストハウスが建設される可能性があるが、現在ではまだ各1軒にとどまっている。したがって、どこころんでも今の段階ではマス・ツーリズムにはならない。村の構成員は協会員であるなしにかかわらず、輪番でゲ

第4表 サンタ・クルスのゲストハウスの宿
泊客数

観光客の出身国	人数 (単位: 人)
アメリカ合衆国	31
カナダ	2
ベルギー	2
ドイツ	2
オーストラリア	1
日本	1



写真3 サンタ・クルスのゲストハウスの会
員の妻と娘がトルティーヤを作っ
ている

ストを自分たちの家で食事させる。そして、女性を作る手工芸品を販売したり、音楽演奏（マリンバ、アコーディオンなど）や踊りができるものは、それを観光客に提供する。

たとえば、サンタ・クルスのゲストハウスには、1994年1月1日から3月6日まで総計39人の観光客が訪問している。その内訳は第4表のとうりである。6-10月の夏季期間中はゲストがひじょうに少なくなる。サンタ・クルスの場合、南部の主要都市プンタ・ゴルダからバスで約1時間の距離にある。村は80世帯、450人ほどの規模である。マヤ族の1

語族であるモパンという人たちでなっている。このゲストハウスは6人の会員によって運営されている（写真3）。一軒の家が3室に区切られ、2カ所に2段ベッドが一つずつ、そして1カ所に2つの二段ベッドがある。それぞれのベッドには蚊帳がつけられている。石油ランプが全体に一つだけある。観光客のおとす金がすべて会員のものになるわけではないことは第5表からも明かである。

宿泊料金の3パーセント余りが村全体の福

第5表 ゲストハウス宿泊客がおとす現金の配分内訳

種 目	内 訳									
	6人の会員の配当	村の健康・教育向上資金	永続的農業のため	事務所諸費	ゲストハウス維持のため	今後の訓練費	観光代理業者（S氏）	研究会・集会・交通費	政府の税金	
ゲストハウス宿泊料	16.00	12.00	.50	.50	.50	.50	.50	.50	.50	.50
食 事	6.00	5.00	.13	.13	.13	.13	.13	.13	.13	.13
ガイド	5.00	4.00	.13	.13	.13	.13	.13	.13	.13	.13
音楽演奏	10.00	8.00	.25	.25	.25	.25	.25	.25	.25	.25
踊 り	5.00	4.00	.13	.13	.13	.13	.13	.13	.13	.13
物語口承（1時間当り）	5.00	4.00	.13	.13	.13	.13	.13	.13	.13	.13

各欄内の数字は金額（単位：1 ベリーズ・ドル＝0.50米ドル）

社に使われ、同じく3パーセント余りがプンタゴルダのS氏にゲストを紹介するコミッションとして支払われ、残りの60パーセントからさらに石鹼、白灯油、シーツ、トイレット・ペーパーなどを含む必要経費を差し引き、残り75パーセントが6人の会員の間で等分される。食事料金は1人1回6ドルで、これについては5ドルを提供者が手にいれ、村やその他に残りの1ドルが配分されることになる。近くのマヤ遺跡へのガイドは5ドル、村内のガイドは3ドルであるが、これらも基本的にはガイドした者が大半をとり、残りが村の福祉その他に配分される。ゲストは食事を準備する世帯の成員と一緒にするというになっている。食事内容は主食のトルティーリャ（トウモロコシの粉で作った薄パンの類）、豆や米をたいたもの、ゆで卵、カンズメのイワシなどである。

マヤ族をはじめ、先住民の土地は居留地であり、官有地である。土地代はいらない。トウモロコシ、陸稲、豆栽培を主とする農業に従事してきた会員のおおよその年間の収入は3000ベリーズ・ドル（1500米ドル＝15万円余り）であり、ゲストハウスからの収入はおおよそ10パーセント程度を占めるといふ¹⁵⁾ 農作物の約80パーセントは市場に出されるが、価格は低迷し、農業以外の就業機会もほとんどないので、観光客が落とすドルはひじょうに重要であるという。

a. ゲスト・ハウス体験者の感想

プンタ・ゴルダのS氏のゲスト・ハウスには、サンタ・クルスを含むマヤ村のゲストハウスで滞在した観光客が帰途寄って、書き残した感想文がある。彼らの滞在した村はかならずしも同じではないが、ここにいくつかの

ものを引用しておく。

(1)アメリカ人女性：「文化交流の場として評価できる。ゲストハウスをホストの家以上に立派なものにするな。ハンディクラフト・センターを作れば飯を食っているときにも気まずい思いをしなくてもよいだろう」

(2)アメリカ人女性：「アメリカ社会を当り前と思っていた自分が恥ずかしく思う」

(3)アメリカ人女性：「しいて言えば、もっと家族のやることに巻き込まれたかった」

(4)アメリカ人女性：「設備は私たちが慣れ親しんでいるものと比べてたいへん違って、初歩的なものである。しかし、この経験は「マヤ・インディアンが生きているなんて知らなかったは」。

紙数の関係上これ以上の感想文を記載しないが、(1)の感想文を書いた人には、相互交流が同じ地平にたって実現できているという幻想があるようだ。「飯を食っているときに気まずい思いをする」ということは、手工芸品を子どもたちが売り歩いてしばしば食事を中断しなければならないということを意味している。ホストはもともと文化交流の場としては考えておらず、現金収入の機会として考えているので、このスレ違いが生じるのである。(2)の感想文を書いた人は、おそらく自分の町から出たことがこれまでになく、どちらかといえば平均的なアメリカ人の一人という感じがする。自分たちのやることが当り前で、井の中のかわず的な考え方しか持てなかったようである。(3)の場合、「家族のやることにもっと巻き込まれたかった」ということは、ホストの主旨やエコ・ツーリズムの主旨からも反する。現地の人たちの生活になるべく影響を与えないことをうたっているからである。

(4)の感想を書いた人は、歴史的に滅亡したと
思っていた過去の人たちと触れ合えた喜びを
書いている。いずれにしても、マス・ツーリ
ズムを志向する観光客と違い、個人的な接触
をすることに喜びを見い出していることがう
かがえる点が興味深い。

Ⅵ. 小 括

エコ・ツーリズムはこれまでのマス・ツー
リズムとたしかにちょっと違う。それが既存
の（自然、社会、文化的）環境にできるだけ
影響を与えず、しかも現地の人たちに経済的
に貢献し、観光客の落とす金は環境保全にも
使われるという考え方は、たしかに新鮮であ
る。しかし、この種の観光も観光する側とさ
れる側との「力の不均衡」を前提にしている
ので、見られる側の悪影響を最小限に食い止
めることは非常にむずかしい。しかも、ナイ
デヴァーの描くエコ・ツーリズムの進化図式
はちゃくちゃくと進行しているようである。
最近のペリーズのガイドブックにはかならず
トレド地区の試みが記されているし、このプ
ログラムに類似のものも他の人たちが企画し
はじめている。どこへ案内してもらっても金
を要求されるし、食事をしているときには
ビーズの首飾りや布バンド、あるいはバッグ
などの手工芸品を売りに世帯員の女性がやっ
てくる。この点については上に引用した感想
文にもあるとおり、客にはしょうしょう目障
りである。また、マヤの人たちの生活を体験
するといってもこれは、「覗き」でしかない。
本物であるというのはここでも幻想でしか
ない。観光客が見えない仕切りを越えて現地
人に仲間入りすることは短期間では不可能に近

い。しかし、観光客にとって現地の人たちは
あくまでも自然環境（エコ）の一部であり、
ニューヨークやその他の都市に生活する「マ
ヤ族」、あるいは書物の中に現れる「マヤ族」
ではなく、「本物」のマヤ族なのである。感
想文にもあったように、「生きているマヤ族」
に遭遇した驚きは観光客には大きい。本物に
出会ったのである。なぜ、「偽物の」「本物」
を観光客が必要とするかについてはⅡで述べ
たが、私たちには好奇心を満たしてくれるな
にかがつけに必要なのかも知れないし、「後
進社会」の犠牲のうえにある「先進社会」の
1員であるということに対するしょく罪の行
為がなんらかの形で必要とされるのかも知れ
ない。観光という非日常的な行為の過程では、
私たちは思考するのを止め、すでに持っている
知識のストックやステレオタイプの見方
のみを頼りに新たに遭遇する未知の現象を解
釈し、納得するようにできているのかも知れ
ない。

本稿はエコ・ツーリズムに関する素描でし
かない。まだまだ残された課題は多いが、そ
れらについては今後の詳しい研究で議論した
い。本稿で使用した資料の大部分は、1994年
2月-3月の1カ月間のペリーズでの調査で
収集されたものの1部である。本調査は文部
省科学研究費補助金（国際学術研究）「カリ
ブ海地域におけるエコ・ツーリズムの比較研
究」（研究代表者 国立民族学博物館助教授
石森秀三 課題番号 05041025）による。代
表者の石森氏や現地調査でお世話になった方
々に深謝する。

注

- 1) 拙稿：「観光」、(竹内 実・西川長夫編『比

- 較文化キーワード』、上、サイマル出版会、1994、所収)、120-127頁、他参照。
- 2) World Tourism Organization (WTO): Policy and Activities for Tourism and the Environment, WTO, 1989.
 - 3) Kallen, C.: Ecotourism: The Light at the End of the Terminal, E Magazine, July/August, 1990.
 - 4) Britton, R.: Shortcomings in Third World Tourism, In S. Britton and W.C. Clarke, eds.: Ambiguous Alternative: Tourism in Small Developing Countries, University of the South Pacific, 1980: 167-192; Bryden, J.: Tourism and Development: A Case Study of the Commonwealth Caribbean, Cambridge University Press, 1973; Erisman, H.M.: Tourism and Cultural Dependency in the West Indies, Annals of Tourism Research, vol. 10, no. 3, 1983: 337-361; Turner, L. and J. Ash: The Golden Hordes: International Tourism and Pleasure Periphery, Constable, 1975, など.
 - 5) Halbertsma, N.F.: Proper Management is a Must, Naturopa (59), 1988, pp. 23-24: 23.
 - 6) Gulez, Sumer: Green Tourism: A Case Study, *Annals of Tourism Research* 21-2, 1994: pp. 413-415: 413.
 - 7) スミス、V.L.: 観光とリゾート開発の人類学、勁草書房、1991: 7 頁。
 - 8) 石森秀三「島嶼国家と観光開発」、(井上忠司他編『文化の地平線』、世界思想社、1994、所収)、38-52頁: 47頁。
 - 9) Neidever, R.: Ecotourism in Search of a Definition, *Belize Review*, August, 1991, p. 7.
 - 10) *ibid.* p. 7.
 - 11) 拙稿:「エスニック・ツーリズムとカリブ族のアイデンティティ強化について」、立命館国際地域研究 6、1994、113-132頁、を参照のこと。
 - 12) Ashton, Ray: Ecotourism and Its Dangers, *Belize Review*, March 1991, pp. 10-11.
 - 13) Palacio, Vincent and Stephen F. McCool: *Motivations of Tourists Traveling to Belize*, Belize, 1993.
 - 14) (*ibid.*: 10)。1992年4月に観光と環境に関する第1回会議がベリーズで開催された。この会議では、次のような一連の話題が議論された:
 - (1)「環境と文化保存の道具としてのエコツーリズム」
 - (2)「経済発展の道具としてのエコツーリズム」
 - (3)「個人経営とエコツーリズムの発展」
 - (4)「エコツーリズムと海洋・沿岸資源の保護」
 - (5)「生息地と損傷を受けた資源の評価と復元」
 - (6)「保護地の利用」
 - (7)「余暇政策、地域制、収容力」
 - (8)「緩衝地域」
 - (9)「活動と開発地域」
 上述の5者の立場をすべて含む問題が議論された(Henry Young: *Tourism Policy Statement*, Belize City, Belize 1993)。
 - 15) 1991年のベリーズの1人当りの国民総生産額は2,050米ドルであった(『1991世界各国要覧』(二宮書店)、13頁より)。ただ、上にも述べたが、ゲストハウスからの収入は夏季にはひじょうに少なくなり、年間をつうじてけっして一定しているわけではない。